校長室通信

令和８年５月20日号

志免町立志免西小学校
髙良　祐治

運動場では、運動会に向けた練習が１日中行われており、子どもの大きな掛け声が響いています。と同時に、音楽や教員の指導の声が放送機器を通して地域に響いており、ご迷惑をおかけしているのではないかと心配しています。また、毎日子どもたちは、砂ぼこりにまみれた体操服と空になった水筒を持って、ぐったりと疲れて帰宅しているのではないかと思います。洗濯や十分な栄養と睡眠の確保等、ご協力いただきありがとうございます。運動会で、これまでの練習の成果を十分発揮できるよう、応援をよろしくお願いします。

ダメと言われていないから

昨年、全国の校長先生と研修会でお話する機会がありました。東北の校長先生からは、クマが出没した場合の対応に頭を悩ませているという話を聞きました。校区でクマが目撃された場合は、臨時休校などの対応をとりますが、その分の授業時数をどのように確保するのか、保護者と一緒に登下校したり、警察がパトロールしたりしても、実際にクマに遭遇してしまえば、大人でも無力です。命にかかわることなので、本当に悩ましいとおっしゃっていたことが印象に残っています。

東京の校長先生からは、運動会の観覧の仕方について、次のような話がありました。ある保護者がドローンを飛ばして、わが子のダンスを撮影していたそうです。ダンスですから隊形移動等があります。そのため、その子を追いかけるようにドローンが運動場を飛び回っていたそうです。

当然、学校からその保護者に対し、「子どもたちに当たったりしたら危険なのでやめてほしい。」と伝えたそうですが、「どこにドローンでの撮影はダメだと書かれてあるのか」と言われたそうです。

この2つの事例は、数年前まではなかった話です。1つ目の事例からは、時代や環境の変化に合わせて、自分のことは自分で守る判断力を身に付けることが大切になってきていることを実感します。「今日はクマは出ますか？」「クマが怖いので、学校を休んでもいいですか？」等、一人一人が問合せをしてきたら、学校はとても対応に手が回りません。

SARS やコロナウイルスなど、これまで人類が経験してこなかった感染症が流行したように、学校も判断が難しいことがこれからも起こりうると思います。

2つ目の事例からは、学校と家庭が同じベクトルで子どもをはぐくんでいくことの大切さを感じます。

ドローンを飛ばしてでも、わが子のベストショットを撮りたい。子育ての思い出作りとして記録を残したい。このようなわが子を思う強い気持ちはわかります。一方で、第三者から見れば、「自分さえよければいいのか」「もし事故が起きた時はどうするのか」という見方もできます。

ちょっと冷静に考えれば、子どもたちや保護者が大勢集結している運動場でドローンを飛ばすことの危険性や、多くの保護者がドローンを使うようになって、100機くらいのドローンが運動場を飛び交っている下で子どもたちが健気に演技している風景の異常さは理解できるはずです。現代の電器製品等の取扱説明書を開けば、はじめの数ページは、注意事項や禁止事項等の警告表示が並んでいます。学校からのお便りが警告表示だらけになるのは嫌です。

一つ一つの家庭の子どもをはぐくむ考え方は当然違います。しかし、将来に向けて、自分で最良の人生をつくっていく力を少しずつ身に付けてほしいという思いは同じだと思います。

これからも、学校からたくさんのお便りを出すでしょうし、お願いもすると思います。ぜひ、その主旨をご理解のうえ、共に子どもたちをはぐくんでいただければと思います。

ところで運動会は

５月中旬というのに、30度前後の気温が続き、熱中症を気にしながら練習をしなくてはいけません。一昔前までは考えられなかったことです。

そのうち、11月ごろの実施になるかもしれませんし、一堂に会しての運動会という形そのものが変化していくのかもしれません。

環境の変化に合わせて、柔軟に対応することが学校教育にも求められているのだと思います。